

とある。これで彼が如何に重きを在本邦米國代表者に置いたかが解かる。ともかくローズヴェルトの意向は右の如くであつたので、我が政府に於ては、英國との間に大使交換の議を了した後直ちに米國政府とこれが打合を遂げ、また独仏兩國政府とも次でこれに關する交渉を進め、程なく双方大使の任命あつて、在華府及び在ベルリン日本公使館は翌三十九年一月七日、在パリ日本公使館は同月二十九日、いづれも大使館に陞格した。

以上は小村が外相として、またその不在中桂首相が臨時外相としてこれを実行し、または実行の準備を整え置き、後継の西園寺内閣が直ちにこれを実施したものであるが、英米独仏既に我方と大使交換の拳に出たので、自余の列強も長くその例に洩れるの理なく、伊澳兩國政府もまた相次で同様の内議を我が政府に致し、交渉直ちに成り、たゞ該兩國の予算の關係上時期少しく遅れ、その翌四十年の二月に至り漸く陞格を実行した。露國とは戦後暫しは双方睨合の姿であつたが、四十年七月第一回日露協約成り、極東の天涯暗雲全くその影を絶ち、兩國の關係一新するや我が政府はその機会に於て兩國相互に外交代表機關を陞格せしめ、相互尊敬の意を敦うするを適當なりと認め、露國政府に對し内意を質したが、同國政府もこれを以て最も事宜に適するものと認め、全然我が提議に同意する旨を答え、次でこれに要する法律及び予算案を議會に提出し、翌年露曆二月十七日(明治四十一年三月十一日)の下院に於てこれが討議の際、一部議員中には東京駐劄使臣の地位を昇すも露國外交の根本が腐敗すること今日迄の如くならば、何等効なしと論じ、日露開戦前のローゼン公使を云為して激烈なる攻撃を加えたものもあつたが、外相イスマヴォルスキーは起つてこれに答え、詳に日露關係の近状を説明し、議會の大多数はこれに満足を表した末政府案を可決し、その結果日露兩國政府は同四十一年五月一日を以て相互使館の陞格を実行するに至つた。

第九章 樞密顧問官から駐英大使時代

明治三十九年・一カ〇六年一月七日、桂内閣の瓦解と共に小村は外相の印綬を解かれ、その後二日を経て同月九日、樞密顧問官に任ぜられた。小村の外相引退の翌日、伊藤首相は人に「あれだけの大事業を成した小村を辭職の儘にして置くんなんテ……」と語つたことがあるが、小村の樞府入りはよしんば直接ならずとするも、間接には伊藤の推輓に負えるものであつたことを察すべきである。

されど小村の樞府にいたのは半歳に満たず、同年六月六日、当時英京から帰朝して外相となつた林董伯に代り、特命全權大使として、英國駐劄を仰付けられた。駐英大使の職が当時我が外交機關中最重要な地位であることはいふまでもない。入つて外務大臣たらずんば出で、駐英大使である。小村は七月十八日東京を發して新任地に向い、米國を経て八月十六日ロンドンに着した。

小村の駐英時代は、英國の内外最も多端の秋であつた。彼のロンドンに着任したその年には、四月に総選挙があつて自由党は大勝利を博し、翌一九〇七年・明治四十年の五月には地中海の現状維持に關する英西協約成り、八月にはベルシャ、アフガン、チベットに關する英露協約の調印を見、その翌年四月には、英國首相カメル・バンナーマンが退いてアスキスがこれに代れる政変があつた。歐洲列強は、一九〇六年(明治三十九年)のアルゼンチス會議に次ぎ、翌〇七年に入りては独仏兩國の關係はモロッコ問題にからんで緊張し、獨國は第二回海牙平和會議に於て軍備縮

小の討議に加わるを避け、翌々〇八年には二月にポルトガル国王及び王儲の殺害に遭つたのを序幕とし、三月にヴェニスに於て独伊両帝、八月にクロンベルクに於て英独両帝、次でイシルに於て英墺両帝の会見があつた。十月には奥匈国のボスニア・ヘルツェゴヴィナ両州の併合、ブルガリアの独立に伴つて近東の危機を迎えたなど、歐洲の国際政局は波瀾重畳、随つて英國の内治外交もこれに連れて多忙を極めた。この間にあつて我国も、仏露両国との間に相次で東亞の平和安寧に関する協約を締結した。これ等国際政局の推移に関し小村は終始注視を怠らず、その本国政府へ逐次稟申した意見が、当時如何に廟議の決定に寄与すること大なりしかは説明を要しない。

されど飾りなくいえば、駐英大使としての小村は、その後半生の中にあつて最も不得意の時代であつた。蓋し外交官必しも外交家にあらずと均しく、偉大なる外交家必しも優秀なる外交官にあらざるは、なほ帷幄の將帥の必しも攻城野戦の闘士にあらざると理は同じである。小村は一国外政の重責を双肩に負う首脳者としては稀有の大材であつたけれども、歐洲向の交際官とはその器を異にし、いわゆる賓客的外交官としては、長所よりも寧ろ短所を有した。殊に当年の倫敦社交界は、ヴィクトリア朝の地味な時代を送つてエドワード七世の華美な勢を迎え、宴遊、驪樂、舞踏、ブリツヂ等夜に繼ぐに日を以てし、この道の趣味嗜好を有する者でなければ交際場裡に馳騁して名声を博することとは困難であつた。これは彼の賦性として得意とする所ではなかつた。小村は曠古の戦時外交を一身に負うて国事に尽瘁した疲労もあり、自然英京では努めて現実の政治と離れて専心休養に志し、日々圖書に親しみ、思索に耽り、僅に同年秋四週日の休暇を得て仏伊の間を旅行したる外、公務にあらざれば殆んど館門を出でず、公事にあらざれば殆んど訪人に接しない風であつたので、往々彼の閉戸に過ぐるを難する声もあり、時のタイムズ外報部長チロルは、我

が政府当局者に対し注意を促したこともあつた。蓋し小村の前任者だつた林は寛厚、温容、客に接して倦まず、社交界に出入して愛嬌を惜まず、人をして愛着の念を生ぜしむるに努めたるに反し、小村の稟資の之を許さざる、また敢てこれに倣わざる、その対照が著しく目についたのである。桂は後年人に語り、

「小村は英國在任中は全く政治と離れ、一に読書に耽り、努めて俗事を放擲して休養に専らであつたようで、実際に務めず新聞記者に面会せずとの非難屢々聞へ、チロルの如きは書を我が政府に寄せてこれを訴ふる程であつたが、自分は小村の意の存する所を知つていたから、これを一笑に附してゐた」

といつたが、これは確に能く小村を知る人の言であつた。後年彼の訃報ロンドンに達するや、チロルは東京の一知友に書を寄せて大に哀悼の意を表し、しかもその中に於て卒直に「侯爵と自己との關係は常に極めて親密であつたが、時にはその極端の秘密性には堪え難く感じたこともあり、その前任林伯及び現任大使（加藤）の如き嘖々たる名声を博し得なかつたのは、疑もなく之に職由する」と記したが、新聞記者としては特にその感が深かつたであらう。けれども外相グレーの如きは深く小村の人と為りを解し、彼を信すること最も厚かつたようで、その他にありても、畏服した有力な英人は尠なからずあつた。当時、大阪市關係の外資輸入の用向で渡英した某は、小村の紹介で倫敦の金融界に名あるサー・クリフトン・ロビンソンに面会した折、ロビンソンは衷心小村の品性を称揚し「小村大使は眞の政治家である」と激賞したものである。されば我が朝野の間にありても、彼を識り彼を解せるものは世の褒貶を一笑に附したが、小村もまた毀誉の外に超然として専心なお修養を怠らなかつたようである。小村は曾て旧書生の榎本（卯平）の英國行を送るに際し「英人は万事實際的です、理想はありません。英國に行つたならば實際病に罹らぬよ

うにし、その社会から孤立して一つ自分の理想を充分高く御持ちなさい。理想は幾ら高く持つても差支ありません。」との語を以て餞したが、小村は後年英京で自らこれを実践した。

小村は自身の修養に兼ねて一は我が元老啓発の必要を感じ、国政処理に関する資料の蒐集には余念なかつた。新刊書籍を読破し、特にインド、ペルシャ、バルカンに関する名ある著作は悉く閲して剩さなかつたが、読書の範囲は必しも国際関係のものに限らず、財政経済産業その他あらゆる部門の書巻に及んだ。彼は我国の外交官の特に財政経済方面の知識に欠くる短所あるを認め、自身率先その欠陥を補うに志し、努めて経済関係の書籍を読んだが、社会問題に関する著書論文をも熱心渉獵し、所論に解し難い所があれば時には親しく筆者に就て疑を質す程であつた。されば小村が後年第二次桂内閣に第二次外相たりし時、かの幸徳事件の起るや、小村は他の閣員よりも、主管の当該大臣よりも、遙に微細かつ的確なる見地によつて所懐を述べ、閣僚を驚かしたこともあつたが、彼の平素の蘊蓄からすれば敢て怪むべくもない。以前は社会主義取締の任に当る当局者中には、やゝもすれば社会主義と共產又は無政府主義を混同視せんとする弊があつたのを戒め、社会主義の本質を理解して寛嚴宜きを得るの方針を閣僚官憲に説いたのは小村であつた。少くも彼はその重なる一人であつた。小村はただに堅苦しい文獻の間に思索を練るに止らず、徒然の折、舞踏の教科書を繼いで運歩の研究を試みたが、量の上の水練で思うようには往かず、遂に書を投じ、「とても駄目だ」と歎じた、という逸話もある。同僚の米国大使もまた全然舞踏を解しないので小村と二人が、ロンドン外交団中の非舞踏党たる縁で特に忸怩になつたことは、小村が例により肩を揺ぶりつゝ呵々大笑して語つた所である。小村は

単に多読せず、多読にしてかつ精思、これが彼の読書法であつた。曾て後輩に孟子の尽信書則不如無書の語を援いて読書の方法を教え、書は批判的にその所説の当否を沈思黙考し、会心納得するを俟つて始めて知識の材に用ゆべしといったことがあるが、確かに読書法の要諦を穿つてゐる。彼は年少頃から常にこの要諦を離れず、かつ単に一書のみを耽読しないで、一問題に会う毎に関係の書籍三四種を併せ読み、読んでは考え、考へては読み、紙背を貫き、問題の核心に触れずんば已まなかつた。

されど小村は、徒に読書に耽つて社交を全然没却したのではない。無為消光は賦性の許さざる所で、大使として重要な社交には勿論挺身努力した。四十年五月伏見宮貞愛親王殿下のガーター勳章答礼使として渡英せられし折、殿下には山本海軍大将、西陸軍大将以下の諸員を随え、同年五月六日ロンドン御着、七日には宮中に於て盛大なる晩餐会があり、十四日の小村が殿下を主賓に仰いで催した晩餐会には、英国の諸皇族、貴族、文武顯官八十有余名列席し、引続き催せる大夜会の参席者には、右の外朝野の淑女紳士千有余名を算した。殿下滞京中の宮廷、ロンドン市、その他諸方面の款待歓迎は到れり尽せりで、英帝よりは殿下に贈るにバス大勳章を以てせられ、ケムブリッジ大学は殿下に名誉学位を呈した。十六日殿下には小村を随えて英国諸都市を巡遊せられ、到る処官民の熱誠ある驩呼を受けさせられ、同月末、殿下には英国を辞し、カナダを経て帰朝の途に就かせられ、特に英帝の御思召にてヴァンクーヴァーからは英国の一巡洋艦に搭乗、七月十四日横浜に帰着あらせられた。思うに日英間の関係は両度の同盟協約により親密を加え、さらに前年のガーター勳章捧呈使節によりその親好を増したが、殿下の渡英にて両国皇室並に官民間の関

係は層一層鞏固を致した。

しかも殿下滞英中に係る小村の努力は、単に社交的方面に限局せず、別にその際に偶生した重要な国務に執筆せるのを見逃してはならぬ。すなわち要は、殿下扈從の山本、西郷大將がその際を機とし、前々年改訂の日英同盟協約第七條に關し英國軍事当局者との間に軍事に關する諒解を遂げたことで、その交渉中に一、二の難件ありし折、小村は委員の間に立つて折衝の進捗を助け、その勤勞また少くなかつた。

彼は英京にあること二年ならざるに、明治四十一年の七月三日、西園寺内閣は骸骨を乞ひ、同月十二日新内閣組織の大命は桂に下つた。同日桂から飛電があつた、「拙者内閣組織の大命を拜せり、閣下を外務大臣に推薦せんとす。御同意を希望す」と。小村はこれを諾した。越えて同月十四日、第二次桂内閣は成立した。大蔵大臣は首相桂がこれを兼任し、寺内陸相、斎藤海相、共に故の如く、特に寺内は小村の帰朝する迄臨時外相を兼攝することゝなつた。次で小村は帰朝の電命に接したので、同月二十七日ロンドンを發し、ウキーンを迂回して露都に出で、シベリアを経て八月二十六日帰朝した。彼が特に道をウキーンに取つたのは、一は未見の旧都を觀光せんがためでもあつたが、主たる意圖はバルカン問題の真相を捉うるに至便なる同地に於て、これに關する多少の見聞を遂げんと欲するにあつた。露国政府にあつては彼に優遇を表し、皇帝謁見の取計、外相イスヴォルスキーの午餐、シベリア鉄道専用車輛の提供等、小村のために大に尽す所があつた。ただ露帝は当時離宮行在中であつたので、旅程の都合上、拜謁の願出はこれを辞退した。その露都滞在中、外相その他若干の有力者と会見して驩を交えた外、在同地落合代理大使を伴うて特に

旧知のウキツテをその閑居に訪うた。ウキツテは往事ポーツマスより帰朝して後程なく挙げられて首相となり、露国憲政の創業に力を致したが、露帝の御覺え芽出度からず、在職半歳にして一九〇六年の五月職を退き、当時失意の境遇にあつた。彼は前年のビュルキョ密約に反対し、外相ラムズドルフと共にその廢棄に努力したが、しかも彼は夙に別種の基礎にて露仏独三国の親善を固むるの意見を有し、仏独両国の財界に名声あるの自信よりして、首相桂冠後進んで駐仏大使たらんことを希望したが、露帝これに賛成せず、当時親仏排独の念漸く強きを加え来れる外相イスヴォルスキーも、ウキツテの駐仏大使たるを歐洲政策上露国に不利を來す虞ありとして反対したがため、その志成らず、愈々以て不遇を歎ずるの際であつた。一説には、ウキツテを駐仏大使に勧誘したのは露帝で、しかもこの勧誘は、ウキツテの駐仏大使たらんと欲する念を利用して、露帝がこれを外相ラムズドルフの退職を諷勸するの具に供したとある。露帝の真意如何は措き、ラムズドルフの後任たるイスヴォルスキーがウキツテのパリに出使するを好まなかつたのは事實のようで、旁々彼は遂に志を達するを得なかつたものと見える。とにかく當時怏々として樂まなかつたウキツテは、小村を迎えて喜び措かず、情逼り辞窮まるところがなかつた。小村は先づ口を開いて、「往年ポーツマスにありては御同様國家のために全力を尽して和議の談判に當つたが、今日から回想すれば当年のことは真に夢のようである。今や形勢一変、日露兩國は既に肺腑の友である。大に胸襟を開いて風月を談すべきか」と。ウキツテ莞爾として応え、慨然として曰く、「ポーツマスのこと、當時世人は余を以て大成功とし、余も心中竊に自負する所があつた。然るに歲月と共に人心は變じ、今や余を難するもの多く、各方面よりの攻撃頗る強きを否み得ない。これに反

し貴国にありては、始にこそ失敗の事も聞えたようであるが、事の真相次第に明白となるに連れ、国民よくこれを諒解するに至つた。成敗の世評なるものは殆んど当てにならない」と。心中深く昨是今非の感慨なきを得なかつたのであらう。

第十章 第二次外務大臣時代

第一節 外交政策の確立

小村は英国より帰朝の翌日、すなわち四十一年・一九〇八年八月二十七日、予定の如く外務大臣に親任せられた。第二次桂内閣に於て最も重きを成した人物は内相平田、陸相寺内、通相後藤、農相大浦、及び外相の小村で、特に小村と平田とは桂の両翼として、内外経綸の両智囊として、陰然新内閣の中堅たるの實があつた。桂の第一次内閣にあつては、小村より前に台閣に列した先輩として児玉、山本、清浦、芳川の諸星があり、閣臣としては彼は寧ろ後進の方であつたが、第二次内閣に至りては、小村は既に閣僚として故参の班に列し、特に第一次内閣に於けるその偉功は、自ら小村をして押しも押されもせぬ台閣の柱石たらしめ、桂自身が七年前に比し貫祿著しく加わり、政友よりも政敵よりも共に識見手腕の卓絶な政治家として推敬せられたと均しく、小村もまた朝野随一の英邁なる外交家として世人の胆仰を受けた。桂は外交のことは小村に全幅の信任を繋ぎ、その画策に聴き、その施設に委して毫髪の掣肘を加えなかつた。

小村の外相官邸に入るや、往年の第一次外相の時と異り、家族はこれを小石川の私邸に置き、僅に一、二の従僕を